

各関係機関の長 殿

鹿児島県病害虫防除所長

令和5年度病害虫発生予察特殊報第2号について（送付）

大隅地域の一部のサツマイモほ場において、本県で初めてムツスジアシナガゾウムシの発生・加害が認められたことから、特殊報第2号を発表したので送付します。



なお、本情報は病害虫防除所ホームページ（www.jpnp.n.e.jp/kagoshima）にも掲載しています。

病害虫発生予察 特殊報第2号

1 病害虫名 ムツスジアシナガゾウムシ *Sternuchopsis waltoni* (Boheman)

2 発生作物名 サツマイモ

3 加害状況

- 令和5年10月27日に大隅地域振興局農政普及課が鹿屋市のサツマイモほ場で、本県では未確認のゾウムシと茎葉への加害を確認した。
- 同年11月1日以降、県内9市町において53ほ場のサツマイモほ場を調査した結果、鹿屋市、志布志市および大崎町の合計6ほ場で発生を確認した。
- 発生が多いほ場では、葉柄などの加害、脱出孔、各ステージの虫（成虫、蛹、幼虫）が確認されたが、塊根部の加害は認められなかった。また、茎葉などの激しい枯れ上がりなどは見られず、収量への影響は比較的小さいと考えられた。

4 発生種の同定

門司植物防疫所に同定を依頼したところ、ムツスジアシナガゾウムシ *Sternuchopsis waltoni* (Boheman) と同定された（同年11月17日回答）。

5 本種の特徴

- 成虫の体長は約9mmで、背面は灰色地に黄色い縦筋が特徴的である（図1）。
- 成虫は主に葉柄を筋状に加害するため（図2）、葉柄が折れたり（図3）、切断され落葉する場合もある。また、幼虫がつる内にせん孔するとその部分が膨らみ（図4）生育不良となる。また、幼虫はつる内で発育し、蛹を経て羽化すると脱出孔（図5）を開けてつる外へ出る。塊根への加害は認められていない。

- (3) 前述した茎への加害の特徴に加え、加害部のつる内に虫糞が詰まっていないこと、塊根部の加害がないことおよび脱出孔がやや大きいことなどがアリモドキゾウムシやイモゾウムシと異なる。
- (4) 寄主植物はサツマイモ、エンサイ、ヨルガオなどのヒルガオ科植物とされる。なお、海外では成虫がジャガイモ、ダイズ、カンキツなども加害するとされるが、国内ではフジ、ヨモギで加害が確認されている。
- (5) 国内での生活環は不明であるが、中国では年間2～3世代を経過し、成虫は主に石の隙間や樹皮の割れ目、ほ場付近のヒルガオ科雑草などで、老熟幼虫もつるの中で越冬する。冬期が温暖で夜温が概ね0℃以上の地域では越冬成虫の生存率が高く、少雨で干ばつの年に発生が多いとされる。
- (6) 本種はイラン、スリランカ、中国、台湾、東南アジアに分布し、国内では奈良県で発生が確認されている。

6 防除対策

- (1) サツマイモほ場内および周辺の残渣などは適正に処分する。
- (2) サツマイモほ場周辺のヒルガオ科雑草を除去し、環境整備に努める。
- (3) 本年作で発生が認められた地域などでは、越冬成虫が翌年4月上旬頃には活動を始めていると考えられるため、令和6年作は葉柄の加害など、ほ場での早期発見に努め、必要に応じて、成虫の捕殺や膨らんだつるなどを除去する。

7 参考文献等

- (1) 平成29年度病害虫発生予察特殊報 第2号 奈良県病害虫防除所
- (2) 飛鳥地域で見つかったムツスジアシナガゾウムシ 木村史明 橿原市昆虫館 研究報告



図1 成虫（体長：約9mm）



図2 成虫の葉柄（裏側）加害



図3 葉柄加害による折れ症状



図4 つるの膨らみと内部の幼虫(右上)
蛹(右下)



図5 つるの脱出孔(直径：約5mm)
(アリモドキゾウムシ、イモゾウムシの
脱出孔と比べるとやや大きい)



図6 つる内の加害状況